懐かしい時代、大正・昭和が甦る豆紙人形 ― マサコ・ムトー 作

69歳で右目を失明し、白内障の左目の視力だけで88歳から手のひらに乗るような小さな豆紙人形を創り始めた母が亡くなってから7年の歳月が過ぎた。腎臓、肝臓、肺、心臓の病を抱え、89歳には大腸癌の手術と、身体中に重い病をいくつも抱え、入退院をくり返しながら母は93歳で亡くなるまでに約300点を制作した。そのうち130点は三度の展示会で大好評を博したパリの地に寄贈し日本にはない。今回は日本に残っている作品の中から100点を展示した。路地裏の子供たちの遊びや大正・昭和の風景を再現した母の豆紙人形は消え行き、忘れ去られようとしている日本の懐かしい昔を運んで来てくれる。亡くなる半年前に「これを完成したい！」と取り掛かった「東海道五十三次」は出発の日本橋→戸塚の茶屋→静岡(茶摘)→長良川の鵜飼と創り進む中で自身の残り時間を悟り、終点の「京都」を一足飛びに作り終えて最期となってしまった。

生涯クリスチャンだった母の想いを込めた「聖書物語シリーズ」、生まれ育った大正から昭和までの「日本の女性の髪型の変遷」の作品は、紙人形作家マサコ・ムトーならではの独特の世界観に満ちている。

母の世界は素朴で柔らかく温かく逞しい。闘病中の動けない時期、ベッドから見える西の空の雲の移り行く様を小さな絵葉書に水彩で描いた「雲日記」は、体が動かない痛みや苦しみではなく、暮れなずむ空の色、茜色に染まった雲、赤々と燃える夕陽など、自然のもたらす素晴らしさ美しさに心震わせ、喜びと感謝と希望に満ち溢れている。「今が始まり。毎日が始まり。今日を悔いなく生きていれば、何があっても怖くない！」そんな母の言葉を豆紙人形と共に届けたい。

大正・昭和の思い出
豆紙人形・母娘展

母を偲んで真似紙人形 ― ヒロコ・ムトー 作

母が亡くなった時、会う人毎にこう言われた。「お母様の豆紙人形をお継ぎにならないのですか？」だが、子供の頃から夏休みの課題工作にもフーフー言っていた不器用な私が、こんな小さな物を作れる訳がない。「私は母の作品と生き方を伝えて行くだけの役割で…」そう言って逃げていた。ところが、母と同じ病で主人が旅立って一年が過ぎ、心の穴を埋める何かを探して、ふと「作ってみよう！」という気になった。

私は今、「心の宅急便」といういじめ防止や克服のための朗読講演活動をしながら小学校・中学校などを訪問している。その度に子供たちに母の作品を見せ、母の前向きな明るい生き方を伝え、「やろうと思えば　何時だって何だって出来るんだよ」などと語っている。その私が「出来ない！作れない！」と逃げてどうする？そう思えてきたのだ。パリに寄贈し日本にない母の作品の中には私自身がまた会いたい豆紙人形が沢山ある。それを再現して子供たちに見せたい！と急に思ったのだ。それが私にとって新しい人生の目標となった。そして昨年、パリの作品の写真を見ながら作り始めたのだが、どんなに頑張って小さく作ったつもりでも目の不自由だった母の作品より頭ひとつ以上大きい！母は何故こんなに小さく出来たのだろう？！

作ってみて初めて分かったことがもうひとつある。作ることはなんて楽しいことなんだろう？！

命の残り砂を数えて、追いかけてくる時間と競争するように必死で次々と豆紙人形を創り続けているように見えていた母だったが、「楽しかったのだ！作ることは病気を忘れられる至福の時間だったのだ！」ということが分かった。その事を分かったことがとても嬉しい。母の作品にはとても及ばないけれど、母を偲んで始めた66歳からの“真似紙人形”どうぞご覧ください。

けんぱ

踊りの稽古

一人縄跳び

竹馬

88歳からの豆紙人形
マサコ・ムトー

盆踊り

姉妹

お掃除

大正・昭和の思い出

豆紙人形・母娘展

2012.5.23(水)－5.27(日)
11:00am－5:00pm(最終日4:00pm)

山形 花笠音頭

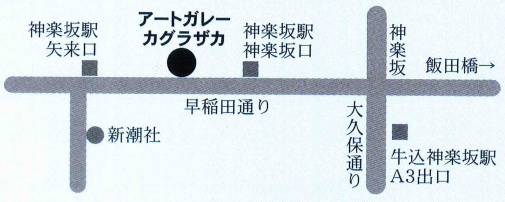
縁日

お手玉

66歳からの真似紙人形
ヒロコ・ムトー

下関 八丁浜祭り 太鼓引き回し

ART GALLEY KAGURAZAKA
アートガレー カグラザカ

162-0805 東京都新宿区矢来町114 高橋ビルB1F
電話:03-5227-1781 FAX:03-3260-6561

交通:東京メトロ東西線「神楽坂」駅下車 徒歩1分
地下鉄大江戸線「牛込神楽坂」駅徒歩4分
JR総武線「飯田橋」駅南口下車徒歩8分